

Citation: Homik J, Cranney A, Shea B, Tugwell P, Wells G, Adachi JD, Suarez-Almazor ME. Bisphosphonates for steroid induced osteoporosis. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 1999, Issue 1. Art. No.: CD001347. DOI: 10.1002/14651858.CD001347.

CRG名: Musculoskeletal

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 17 November 1998

Clib issue No.; N/U: 2007 issue 4; -

背景: 副腎皮質ステロイドは、免疫抑制薬として炎症性疾患に広く用いられている。ステロイドで治療する疾患には、膠原病、喘息、炎症性腸疾患、臓器移植などがある。骨喪失はこの療法の重篤な副作用である。いくつかの研究でステロイド性骨粗鬆症に対する治療としてビスホスホネートの使用が検討されており、様々な程度の効果が報告されている。ビスホスホネートの使用を推奨する以前に、ステロイド性骨喪失の予防に対する有効性の程度を最も適切に推定することが必要である。

目的: ステロイド性骨粗鬆症の予防と治療に対するビスホスホネートの効果を評価する。

検索戦略: Cochrane Musculoskeletal Group trials register、MEDLINEを1997年までおよびEMBASE(1988年～1997年)を検索し、参考文献リストの選択的ハンドサーチを行った。過去5年間の関連する学会の学術的抄録もハンドサーチした。過去6か月間のCurrent Contentsの電子検索を行った。将来の改定ではCochrane Controlled Trials Register(CCTR)を検索する予定である。

あらゆる言語を検索に含めた。実務上の理由から英語のみを含めたが、将来の改定ではあらゆる言語を検索し、翻訳する予定である。

選択基準: ステロイド性骨粗鬆症の予防または治療に対して種類を問わずビスホスホネートを使用し、アウトカムを報告しているすべての比較臨床試験(CCT)を評価した。試験は成人のみを対象とし、被験者にはステロイド用量として平均7.5mg/日以上以上の投与を必要とした。

データ収集と分析: 2名のレビューアが独自にすべてのデータを抽出した。関心アウトカムは、6か月後および12か月後の腰椎および大腿骨頸部の骨塩密度(BMD)の変化であった。もしあれば、新たな骨折の数および有害作用による中止に関するデータも抽出した。2名のレビューアが独自にすべてのデータを抽出した。連続データおよび二値データともに固定効果モデルを用いて解析した。有意な異質性が存在する場合は、ランダム効果モデルを用いた。

主な結果: 患者842例を対象とする計13件の試験を本メタアナリシスに含めた。結果は、治療群とプラセボ群との間のBMDの変化率(%)の重み付け平均差として報告した。分散の逆数で試験の重み付けを行った。95%信頼区間(95%CI)を示す。腰椎では、治療群とプラセボ群との間のBMDの重み付け平均差は4.3%であった(95%CI2.7、5.9)。大腿骨頸部での重み付け平均差は2.1%であった(95%CI0.01、3.8)。脊椎骨折のオッズは24%減少したが[OR0.76(95%CI0.37、1.53)]、本結果は統計学的に有意ではなかった。

レビューアの結論: ビスホスホネートは、腰椎および大腿骨頸部のステロイド性骨喪失の予防と治療に有効である。骨密度の変化は骨折リスクと相関しているが、本解析から骨折予防効果に関する結論は下せない。

(監訳 尹忠秀)

翻訳公開日: 08年1月11日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点があれば、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版

